土の建築を解く ……vol.5

土蔵の戸前を調べる

早稲田大学理工学術院
准教授　山田 宮土理

幾つかのやり取りをきっかけに

私がまだ学生だったころ、知り合いからの誘いで、移築・再生された土蔵を見学したことがある。設計を担当されたO氏に話を伺うと、全体的に土壁を落として軸組を移築したが、戸前（出入口周辺）だけは土壁を落とさずに仕上がった状態のまま運んできたという。その重量は４トン以上というから、土壁のような壊れやすい重量物を如何にして運び、如何にして新しい土蔵に納めたのかと工事の難しさを想像して驚いた。O氏は土蔵の戸前はまるごと移築したくなるほどに面白く貴重なのだと語ってくれた。私は当時すでに土蔵に惹かれつつあったが、O氏の話を伺うまで戸前にはあまり意識がいっていなかった。O氏の熱の入った話を興味深く聞き入り共感したが、その一方で戸前のどのようなところがO氏を虜にしているのか、判然としない部分もどこか残していた。その後、しばらく時は経ち、ある時お世話になっている左官職人さんが土蔵の戸前について話をしてくれた。聞くと、戸前は一つとして同じものがなくて面白いという。例えば、掛子と呼ばれる段々状のかみ合わせの段数が同じでも、厚く見えるもの、裕福に見えるもの、やわらかい雰囲気や力強い雰囲気など、様々だけれど、一体何が違うのだろう？という。土蔵の顔である戸前はこだわってつくられたものが多くて個性的である。でも確かに、何が違うとこうも見え方が異なってくるのか、と疑問に思った。――こうした幾つかのやり取りが、私の頭の片隅に長年居座っていた。土蔵を見るたびに思い出していたが、漠然と考えていても前進しないので、ある時ふと実測してみようと思い立った。土蔵にとって戸前は特別な部位である。火災の遮断や見栄えのために、左官職人がおそらく最も手をかけ、知恵を絞った部位であり、左官技術の読み解きや継承のた

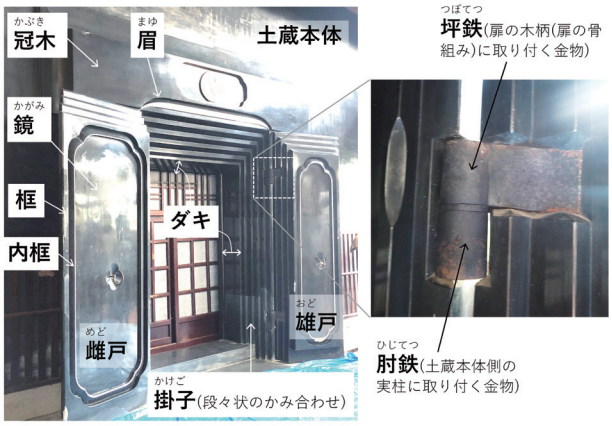


図１　観音扉の土蔵戸前の各部構成
（文献[1]で作成した図に加筆）

美しい土蔵の戸前を前に、実測の方法を考えながらスケッチをする様子。

写真１　調査の様子

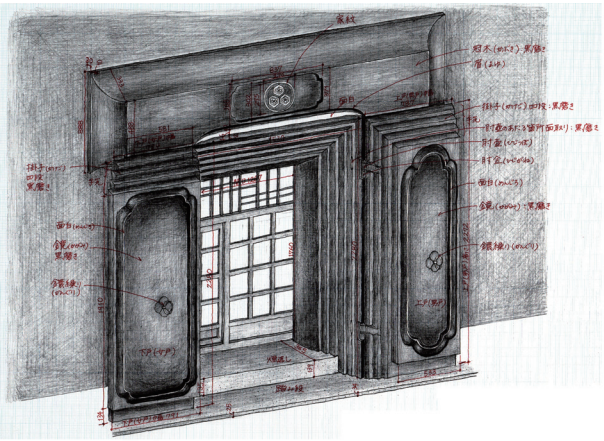


図２　実測した土蔵の戸前（秋田県横手市）

めにも着目して然るべきだという期待感があった。

戸前を細部まで測ってみる

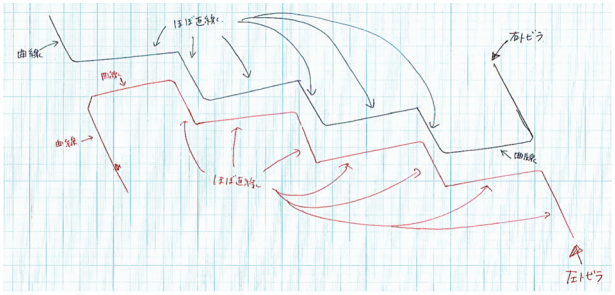
はじめに実測をしたのは秋田県横手市増田町の土蔵戸前である。増田町には葉タバコ栽培や養蚕、銀行や電力事業で財を成した商人たちの築いた土蔵が多数あり、黒漆喰磨き仕上げなどの難易度の高い左官技術が用いられている。戸前も凝っているものが多く、掛子の段数は四段（本三重）が普通で、五段のものもある。実測する最初の一棟でこの町を舞台にするのは恐れ多いことであったが、ホンモノに触れて目を肥やしていくことが必要だと思った。

実測した土蔵は明治後期の建築で、美しく光る黒磨きが特徴的であった。家主の方のお話によると、黒磨きの壁は定期的に、濡れたタオルをかたく絞って拭き、その後すぐに乾いたタオルで拭く、という手入れをしているという。光を美しく反射する壁は、施工した職人の腕だけでなく、大切に維持してきた家主の方の存在なくして成り立たないことを痛感する。

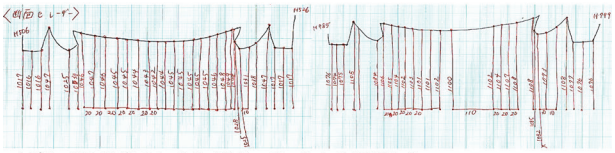
実測したのは図１のような観音扉の戸前である。扉の閉鎖時に内側に位置する雌戸（女戸、下戸）と外側に位置する雄戸（男戸、上戸）とがあり、段々状の掛子でかみ合わさる。開口上部には眉や冠木があり、扉には開放時にみえる鏡と框・内框、引き金物周辺の装飾など、複雑な形状、三次元曲面の形状ばかりが組み合わさっている。土蔵らしさを構成する要素は捉えられるのか、そして戸前の骨組みや施工方法を探るヒントも掴めるのか。そのためには、どこをどのように測るべきなのか、戸前の複雑な形状を目の前に頭を抱えてしまった。

その時出した答えは、思いつく限りとことん測ってみることであった。例えば掛子やダキの幅は高さによって異なる可能性があるため[注] 複数箇所測ってみよう。掛子のかみ合わせの精度を知るために原寸大で形を取り、かみ合わせてみよう。鏡など、むくりのある箇所はどの程度のむくりなのか測ろう。内框は型引きでつくっている可能性を考えて複数箇所の断面の形を取ってみよう…という具合である。実測箇所の多さに加え、スケッチをしたり測り方を考えたりする時間も長く、何人もの協力を得て実測したにも関わらず１棟の戸前を測るだけで丸三日間を要してしまった。今となって考えれば測りすぎている箇所や、測り足りない箇所もあり、自分の勉強不足が悔やまれるが、細部まで測りまくる手作業によって戸前をよく観察することができ、第一歩としてはまずまずだったように思う。

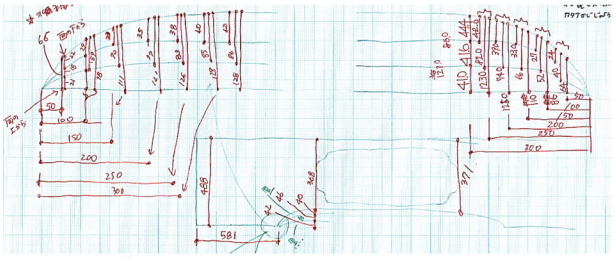
このような最初の実測調査を行ってから数年の月日が経った。その後も毎年少しずつ調査を続けているが、当初よりは戸前に関する知識も増え、実測の方法も改良している。調査結果も多少は蓄積してきているので、徐々にまとめていく予定である。それ



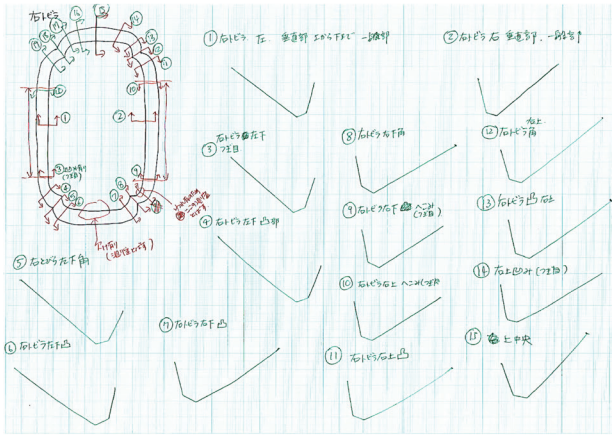
▲掛子を原寸大で形をとり野帳に写した様子（手先の掛子の例）。
調査後に持ち帰って図面に起こし、かみ合わせの精度を検討した。



▲鏡にどの程度のむくりが付いているかを実測した。



▲眉周辺の曲線の形状・寸法を記録した。



▲内框の形状を記録するため、また施工方法を考察するため、
多数の箇所で原寸大の形を取った。

図３　調査野帳の例

でも、戸前をつくる技術や職人の工夫、時代変遷や地域性など、戸前の個性の要因となる要素は多く、探求はまだまだ道半ばである。

おわりに

冒頭に話したO氏がなぜ戸前に夢中になっていたのか、戸前を知るほど共感は強くなる。当たり前のように美しい形の掛子が、かたちの無い土と漆喰でつくられたことを想像するとき、じんわりと感動が沸き上がってくる。一からかたちを与えていくのだから、無限通りの創意工夫があっておかしくない。戸前を探求することは、書物に残されていない多様な創意工夫をあぶりだす作業である。手間のかかる美しいものづくりが減る現代に、戸前はものづくりの神髄を教えてくれるような存在なのである。

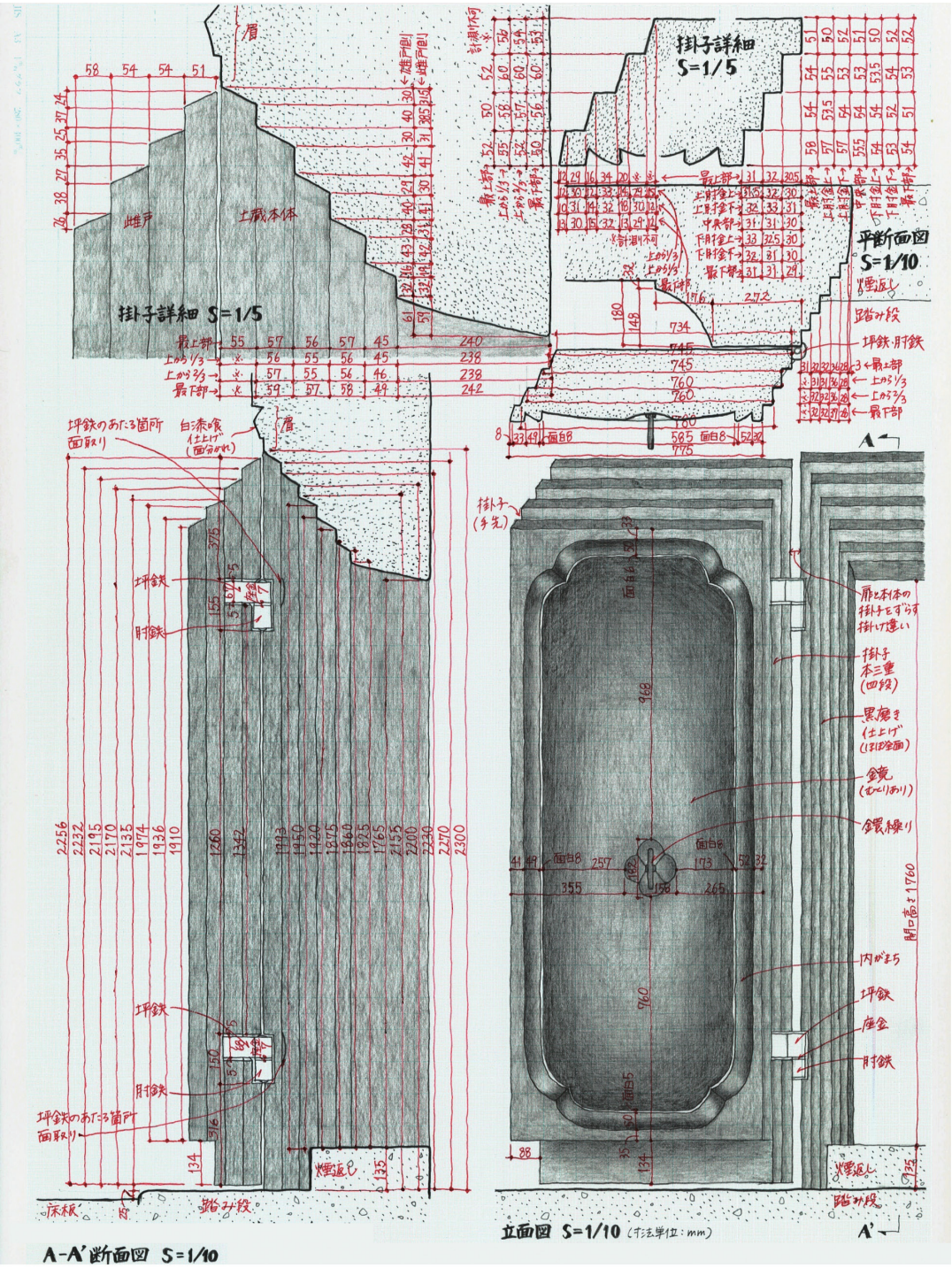


図４　雌戸の寸法（秋田県横手市の土蔵戸前）

本稿で紹介した秋田県横手市の土蔵の調査は、家主の方、黒田稔氏、小林隆男氏、中村航氏のご協力により実施することができました。また、実測には国本円香氏、李雪氏、山内徹氏、清水沙羅氏、益田実佳氏のご協力を得ました。ここに記し、謝意を表します。

【注】文献２）によると、完成時の重厚な扉が自重で回転してしまわないために、下肘鉄より上肘鉄を土蔵本体側に寄せて取り付けるとされている。これに伴って掛子やダキの寸法に上下差が生じると考えられた。

【参考文献】

１）山田宮土理，国本円香，李雪，輿石直幸「土蔵戸前の左官技術に関する研究　その１　秋田県増田町の土蔵の実測調査結果」日本建築学会学術講演梗概集，pp.695-696,2021.7

２）猿田長司：匠家土蔵戸前雛形 全,明治15年, 千鍾房

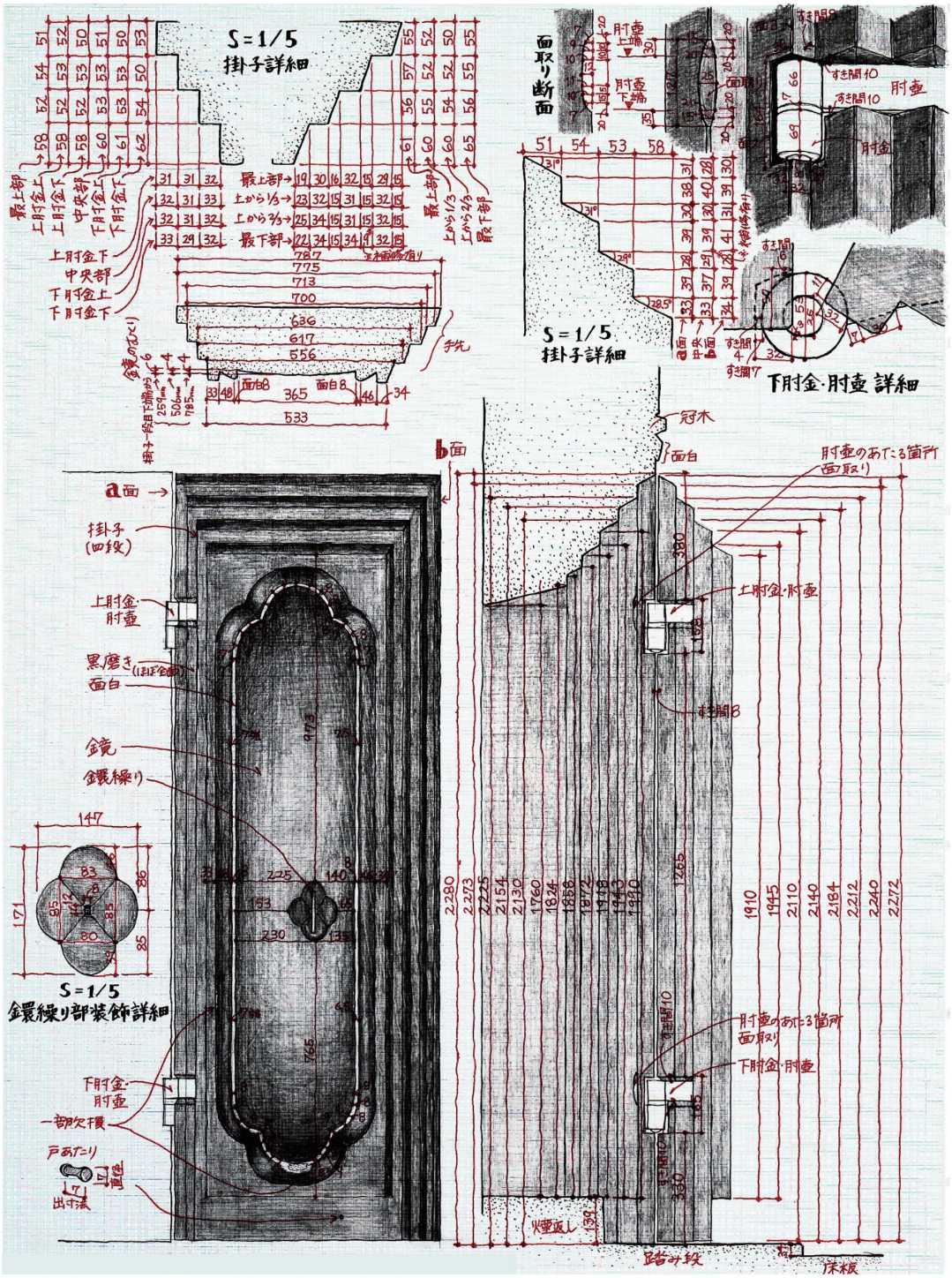


図５　雄戸の寸法（秋田県横手市の土蔵戸前）